

Title	ミカエル・ハリントン著 もう一つのアメリカ : アメリカ合衆国に於ける貧困
Sub Title	Michael Harrington; The other America, poverty in the United States
Author	中鉢, 正美
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.9 (1964. 9) ,p.747(67)- 751(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19640901-0067
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640901-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、配慮をなしたは、良心的なブルジョア以外にはいなかったはず」(二六三ページ)といわれるが、この配慮が同情や社会批判も意味するならば、そこには小ブルジョアから良心的インテリ、貴族に至るまで、さまざまな層が存在したことを忘れるべきではない。一八一五年の過渡的恐慌以外にも、近代的労務管理が社会主義へと結晶する思想的触媒には何があったのか、たとえばゴドウィンや、リカードゥ派社会主義者たちとの関係をどう把握するのか、そしてそこで、オウエンの実践活動はどのような意味をもっているのか、研究の材料はまだ未消化のままである。

ブルジョア性をもってオウエンを割り切るのは、確かに興味ある試みではあるが、割り切れない部分にむしろオウエンの意義がある。哲学的急進主義のペンサミズムをもって、万一にも、プロクリステスの寝台^(*)たらしめてはならない。

(*) たとえばオウエンの自叙伝にいわく、

「このちよつと類のない計画に一株を申し出たその次の人は、かの有名なジェレミー・ベンサムであった。彼はすべてが根本的誤謬に基いている法律を、この誤謬を発見することなしに修正せんとする努力に、長い一生を費した人で、またそのゆえに彼の一生は、たえまなき善意の努力の生涯ではあったが、個々の法の害悪を示しそれを救済せんとすることに費され、決して一切の法の根底を突きもしなければそれらのものの誤謬・害悪の原因を認識しなかった。彼は書物を通し、また彼との交友をゆるされたごく少数の自由な心を

持つと思われていた男女——ジェイムズ・ミル、ボウリング博士、オースティン夫妻、フランシス・ブレイス、ブルウム卿、その他二人の一人——を通じてのほか、世の中についての知識がほとんどなかった。——これが彼の世界をつくっていたのだ。」(五島訳一七七ページ)その他二三四ページなど参照。

(**) オウエンは、自分の見解に好意をもってくれた文筆家として、フレッチャー夫人、エッジワース嬢、ポーター嬢、ゴドウィン、ウイリアム・ロスコー、トマス・クラークソンの名を挙げ、好意を持ちながらも経済学や政治学の二、三の点で反対した人として、マルサス、J・ミル、リカードゥ、ジョセフ・ヒューム、ブレイス、アトウッドなどを数えている。(自伝三六九—三七〇ページ)

——一九六四・七・一九——

書評

ミカエル・ハリングトン著

『もう一つのアメリカ』

——アメリカ合衆国に於ける貧困——

Michael Harrington: The other America, Poverty in the United States, New York, Macmillan, 1962.

中 鉢 正 美

かつていわゆる危機の三〇年代、ダンロップのいう「Mass unemployment」がアメリカを襲った時には、国民の大多数にひろがる貧困の問題は政治的指導者層にとっても無視することのできない顕在的な一大問題であった。とりわけCIOの急速な組織化とその政治的活動が、ニューデイルの推進に当ってワグナー法や社会保障法の成立をもたらしたし、アメリカ社会の構成を広汎にわたって一変させる役割を果たしたことは、この間の事情を最もよく物語るものである。そこには強い危機の意識が一般にわたって存在し、改革の運動は中産階級や知識層にも強い支持を得ることができたのである。このような諸改革の結果、労働者をはじめとして組織化の進んだ

貧困の比較的上層部においては、戦時経済の完全雇用的な労働市場をも背景として、次第に国民総生産の分配分が均てんする通路が開かれ、戦後の平時経済への復帰に当って懸念された不況も、ヨーロッパを始めとする経済復興計画や、国内需要の増加等に幸いされて、程なく繁栄の五〇年代に到達するにつれ、福祉国家の掛声の下に貧困の問題はしばらくアメリカの世論の大勢からは忘れ去られていたといつてよからう。

もとよりこの間においても、一九四五年には上院の教育・労働委員会が低賃金問題についての公聴会を開いているし、また五一年には、当時問題であった年収二、〇〇〇ドルという貧乏線についての統計的論議に具体的例証を提供する目的をもって、社会福祉関係団体から大統領経済報告書作成のための両院合同委員会に送られた低所得一〇〇世帯の調査結果が出版されている。さらに五五年と五六年にわたって、低所得問題についての両院合同委員会が開かれるといったように、決して問題そのものが消滅していたわけではない。しかし「R. H. Brenner: From the Depths. The Discovery of Poverty in the United States, 1956.」において、一九世紀から今世紀の二〇年代にいたるアメリカ貧困問題の歴史がとりあげられた場合にも、その目的はむしろこのような経験を、後進国はじめ貧困がいまだ未解決である他の地域での社会活動にいかに関与させるかというところにおかれていたといつてよからう。それが五〇年後半から急速にたかまってきたアメリカ経済における技術革新の波によって、産業の地域移動をとまらぬ経済構造の変動の渦がまきおこ

されてゆくにつれて、ダンロップのいわゆる“Class unemployment”の現象は、次第に組織化された産業社会にも侵入するにいたり、貧困問題はふたたび世論によって「発見」されなければならなくなつたのである。

このような世論は、やがてケネディ政権の登場とともに六一年の最低賃金法改正をはじめとする一連の対策を生みだすこととなるが、これらはいずれも所期の目的を達するに十分なものとはいいがたく、ケネディの後を継いだジョンソンの六四年の年頭教書にも、“War on Poverty”の掛声となつて現われざるをえなくなつてくる。ここに紹介するヘアリングトンの“The other America”は、このような動向に決定的な展望をあたえるものとして、同じ年にミシガン大学の諸学者によって刊行された。

“Income and Welfare in the United States”がこの問題に対する詳細な統計的分析を試みているのとならんで、きわめて注目すべき内容をもつものと考えられる。なお本書は六四年にすでに六版を重ね、ペンギン叢書の特輯版にも収録されて、アメリカの諸大学では社会福祉講座の参考書としても広く使用されている模様である。

二

本書は九章およびAppendixによつて構成され、第一章“The Invisible Land”は、五〇年代の新しい貧困が、政治当局者にうたがへるべき組織も代弁者も持たない「目に見えない貧困」であり、ガルブレイスがいみじくも指摘したように“The first minority poor

in history”であることをとりあげる。それはたしかに、数百万の人口が飢えに泣く後進国の貧困とは相違しているようにみえるが、しかも数千万のアメリカ人口は、身体的にも精神的にも不具の状態にあり、人たるに値する生活に必要な栄養にも、住居にも、教育にも、医療にもめぐまれません、期待感を失つて打ちひしがれている。それはアメリカ人口の五分の一ないし四分の一に達し、その中心は不熟練労働者、移民農業労働者、黒人をはじめとする少数民族、および老人であつて、これらは相混合して経済発展に取りのこされた“Culture of poverty”の悪循環におちいつている。ガルブレイスがその「豊かな社会」の中でこの問題を指摘したのはたしかにすぐれているが、その量的評価においてあやまっている。現在の貧困の「新しさ」は、驚くべき経済発展と一般的な生活水準の向上とが、正にその対極において、相対的には少数者であるが絶対量としては相当数に達する貧困を不断に造り出しているという“upside-down in the economy”に求められなければならない。

第二章“The Rejects”においては、技術革新に取りのこされ、あるいは職場を失つて転落する労働者の貧困が指摘される。一九六一年の最低賃金法改正に当つて、AFLCIOは新たに六五〇万の労働者をもその適用範囲に包括するように提案したが、政府案は約三〇〇万の労働者に範囲を拡大するに止まつた。現在この法律の枠外に一六〇〇万以上の都市低賃金労働者が残存し、それらは週給四五十ドル内外の三〇万人に及ぶ被服産業労働者、四八ドル程度の一二五万人の一般商店員をはじめとして、四六―七ドルの洗濯業・ホテル

することが困難なうちに、次第に“The other America”の住人に転落する場が多いのである。

三

第三章“Pastures of Plenty”は、アパラチアの山地に取り残されて中西部の機械化された農業との競争に圧迫されつつ、次第に都市に流出してその亡命者の集団と化しようとしている零細農民動向を画き出す一方、南部をはじめとする機械化のおくれた自作農が、地域開発による工場誘致にもかかわらず、結局低所得農業と低賃金産業との結合に終つている点を指摘する。また機械化の進んだカリフォルニアの大農経営では、危険な労働条件の下に多くの婦人や年少労働者が、一時間五〇セント足らずの賃金で長時間労働に従事し、その組織化はAFLの「農業労働者組織委員会」の活躍にもかかわらず困難をきわめている。

第四章“If You're Black, Stay Back”では、黒人の都ともいふべきニューヨークのハーレムにおいてすら、黒人家族の半数（白人は五分の一）は年収四〇〇〇ドル以下であり、その乳幼児死亡率は四五・三%（白人は一五・四%）に達する現状が詳細に画き出される。彼等の貧困は、アメリカの貧困の全ての側面と密接に結合しながら、その最も制度化された、古典的な部分を構成する。彼等は最も労働条件の悪い、最低賃金の職場に働き、その上、同種白人労働者の五八%の賃金しか受け取っていない。

以上はいずれかといえばアメリカ社会の停滞的な貧困層に属する

業等の労働者、病院従業員、小売店員、飲食店の皿洗い、バス・ボーイ、家事労働者等によつて構成されている。飲食店の皿洗いや婦人の料理手伝人、あるいは家事手伝人達は、おそらく年額一〇〇〇ドル程度の収入を得ているにすぎないであろう。これらの大部分は未組織であり、その低賃金とはげしい移動とは組合の組織活動をきわめて困難なものとしており、一見組織化されているように見える部分も実は“Racketeers”の手中にあるもので、この点AFLCIOの「不可侵」協定は、これらの恐喝者共を真面目な組合組織者達から防禦する役割を果している。

これらは本来的に経済発展から取りのこされている停滞的な諸階層であるが、これに加えて技術革新により職を失つて転落する労働者が新しい“Industrial Poverty”の問題をひきおこしている。一九二九年には総労働力人口の五九%は賃金労働者であったが、五七年には四七%に減少しており、五三年から五九年の間に一五〇万の労働者が経済活動から排除されている反面、俸給生活者は六〇万も増加している。ロスが“Industrial Feudalism”として指摘しているように、大企業労働者はその生活基盤を専ら企業の福利制度に求めるようになって来ており、例えば五六年にデトロイトのパッカーDが閉鎖されたような場合、とりわけ中年層の熟練労働者達は、上院の失業問題委員会の言をかりるならば“Too old to work, too young to retire”という苦況に立たざるをえなくなる。彼等は労働者階級中の「中産階級」として、自宅を持ち、抵当によつて自由に購買をしていた関係等も手伝つて、簡単に新しい職場を求めて移動

ものであるが、第五章 *Three Poverities* においては、不況とオートメーションの交替過程において、都市生活の新しい問題となりつつある三種類の貧困者、すなわち中産階級の精神的空虚に反抗して脱落するピート族等の知的貧困者、およびカトリックのような旧い文化集団に属する労働者をはじめ、あらゆる社会階級の、文化的背景から転落してアルコール中毒と慈善的救済の間を彷徨する敗残者の群、さらに単にアパラチアの山地のみならず、アーカンサスやミズーリ、あるいは西海岸地帯から、特に戦時中の労働需要にひかれて都市に流入したまま、その文化的生活から疎外されて "*Urban hillbillies*" と化している人々について述べられる。

第六章 *The Golden Years* は、一九六〇年に全人口の略々九%、七五年には一割に達すると推定される六五歳以上人口の約半数が貧困であり、老人の共通性である不健康、稼得能力の喪失、および社会との疎外といった苦悩が、とりわけこれら貧困者の上に重くのしかかって来る事実を強調する。この年齢層におけるかような貧困者の集積は、一部はその半生を貧困のうちに過して次第に老齢化した者によって構成されると共に、他の一部は老齢化につれて上層から脱落してくる不熟練・半熟練労働者、技術革新に取りのこされた熟練労働者、老齢化してから再度追加所得を稼がなければならなくなった婦人、及び社会保障の適用外におかれた農業労働者等を包括していることによるものである。平均としては老齢者の三分の二ないし四分の三は社会保障の適用をうけているにもかかわらず、老齢の寡婦のような身よりのない独身者で年収一〇〇〇ドル以下の者について

では、僅か三七%しかその恩恵に浴していない。彼等は若年層者の移動に取り残されて次第に "*Age ghettoes*" を構成し、彼等に精神的平安をあたえるべき社会事業活動家も、組織の官僚化と経済的制約のために所期の目的を達することができない。

さらに第七章 *The Twisted Spirit* においては、社会の上層部に比較してはるかに多数かつ重症の精神障害者がかかえている貧困層の病理状況が画きだされる。彼等の生活には数種のストレス要因が加重されており、アルコール中毒患者等の場合をのぞけば、精神的欠陥の故に貧困に転落した者よりも、貧困の結果精神に異常を来していると考えられる者の方がはるかに多い。彼等の生活は過密状態にあるにもかかわらず、ほとんど人間的な結合や組織を持たず、宿命論的な孤立に閉じこもっている。彼等の反面に見られる熱狂的な享樂は、将来に希望を持つことのできない人々の必然的な行動の型を示しているにすぎない。

さて一九四九年の住宅建設法は、四年間にわたって八一万戸の低家賃住宅を建築する目的をもって制定された。しかし一二年後の六年に、この計画を達成するにはなお四〇万戸の新設が必要であることを A.F.L. C.I.O. が提案したとき、ケネディ政権は僅かに一〇万戸の追加をもってこれに答えたにすぎなかった。第八章 *Old Slums, New Slums* は、このような現状において依然として残存する古いスラムと、新たに生れつつある住宅群の中に侵入する "*The culture of poverty*" が新しいスラムの問題をひきおこしている点を指摘する。これを解決するには連邦政府による更に大規模な住

宅政策が必要であり、その計画もすでにたてられているが、これを實現する政治的気運はまだまだ熟するに至っていない。

四

かくて著者は最後の第九章 *The Two Nations* において、貧困の諸要因がかくも強固に統合して "*The vicious circle*" を構成し、福祉国家の諸政策も、要するに自らの組織を造りうる者にのみしか役立たず、貧困者が向上の見込みを失って自己の殻に閉じこもっているかぎり、彼等の奮起をうながす前に、先ず豊かな社会の側から働きかけなければならぬことを強調する。両院合同委員会の研究報告書「低所得人口と経済成長」の中で、ロバート・ランブマンは国民の二割が貧困であると推定しつつも、これはアメリカ経済の発展と共に減少し、一九七七年には一割程度に止まるであろうと期待している。しかし経済成長そのものが生みだす構造的失業は、成長の結果自動的に解消するものではない。そこには積極的な政策的活動が必要であり、その計画は全国民を包括するものでなければならず、その主体は連邦政府において外には求められない。しかしかつてニュー・デイルの推進にあたって南部の保守勢力が民主党の政策を支持したのと異なり、今や産業化の進んだ南部においては、低賃金状況を克服する最低賃金法の適用拡大や、とくに三〇年代の政策には含まれていなかった黒人の地位改善を目ざす市民権法等については強い反対があり、これが北部の共和党勢力と密接に結合して民主党政権の改革立法を未然に阻止する役割を果してい

る。これに反して貧困対策を推進する主要な政治的勢力である労働組合と中産階級の自由主義者達とは、南部の保守勢力と共通の政党組織に結合しているかぎり、その主張を實現することは極めて困難である。

以上、本書の内容をなるべく簡潔に要約する必要と、多少評者の興味のあるにも影響されて、比較的統計的な記述の部分を引用しすぎたきらいがあるが、著者の意図はむしろ統計的大量観察の背後にひそむ貧困の現実の姿を生き生きと書き出すことにむけられており、それが本書の主要な魅力を生み出していることは疑いない。しかし同時に *Appendix* においては、現代アメリカにおける最低生活費論争の数学的背景が、ランブマン批判の形で要領よく紹介されている。結論は、要するに六〇年代の初頭において、都市四大家族の標準生活費六一七〇〇ドルの半額を貧乏線と規定した場合、全アメリカ人口の二割ないし二割五分、四千万ないし五千万の人々が、「福祉国家」アメリカの直中にとり残された、「もう一つのアメリカ」の住人に化しているということである。

(四月二十九日・Ann Arbor)